様式２の１

記　入　日 2023 年 9 月 29 日
助成団体名　特定非営利活動法人 植物資源の力

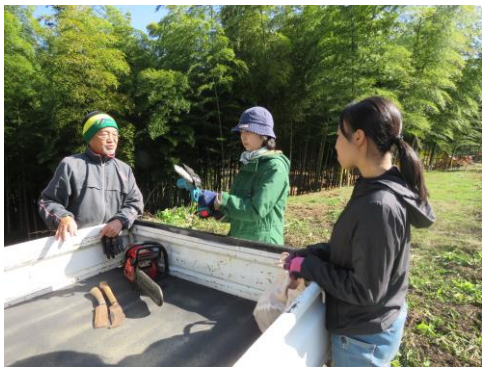
2022 年度「水俣・熊本みらい基金」助成事業報告書

企画テーマ	**地域の不要材となっている竹を熱エネルギー資源として活用するプロジェクト**
取り組み実施期間または日時	令和 4 年 11 月～令和 5 年 9 月

【目的】令和 4 年の気候変動は、改めて温暖化に抗する取り組みを加速させなければならないと実感させるものだった。米の収穫期に九州を直撃した台風 14 号は、多くの被害を出したのだが、一方で今年の夏の天候は、植物たちの成長のための条件としては、とても良好なものだった。人間に都合が悪いが植物には好都合だったという事になる。竹の生育は、いつもの年より本数も多く良好である。生活の場で普通に使えるように竹炭ストーブを仕上げ、温度をはじめ、使用に関する様々なデータを取得する。地域の若者の中に竹炭に興味を持つものが出てきている。燃料としての竹炭使用を普及させていく。
　また、より良い竹炭の燃焼のため破砕をするが、そこで発生する粉炭を食品として利用するため開発された竹炭グラノーラの製造販売の支援を行う。

【内容】

- コロナ禍で人材が乏しいため、地域住民やボランティアで可能な限りの竹林の間伐、竹炭を作った。短期間の参加であったが、昨年度以上に地域を中心として、人が集まってくれた。自分でも窯を作って竹炭を焼きたいという人が増えてきている。しかしながら、どうしても人材確保に時間が取られる。



- 竹林ごとに簡単な竹炭窯を設置し、ボランティアを募り炭焼きを行う。
- 作業自体は、それほど大変な作業ではないが、ピザ焼きや BBQ など、竹炭を使ったパーティーを行う事で人が集まり易くする工夫は、必要。
- 竹炭を焼く時、煙を冷やして、竹酢液を回収する。

■　孟宗竹７本でできた竹炭

●　吸排気用煙突の改良

■　竹炭の燃焼で煙は発生しないが、ペレットストーブの燃焼室への竹炭の送り込みがスクリュー式であるため、竹炭どうしがこすれあって、微細な粉炭が排気口から外部に流失していくため、排気ダクトを延長させ、バケツの水面に当てるようにした。瞬間的に吸水するため外部に一切、排出物が無い状態が作れた。

■　安定的に使用をするため、ストーブを設置しなおした。

■　燃焼皿を浅くすることで、少ない竹炭での良好な燃焼を思考したが、発生する熱量が下がってしまい、元の状態に戻した。

【備考欄】

・2022 年度も暖房用の灯油の消費は、ゼロにできた。

・データ計測が思うようにできなかった。

・ストーブの価格が高く、簡単に他者に竹炭ストーブの購入を勧められない。安価なストーブの開発が必要だと感じた。

・熱や気候変動とは関係ないが、竹炭は、燃焼時に心地よい亀裂音を発生する。暖を取るだけでなく、その音に耳を澄ませ、癒されると言う訪問者が多い。